

# スポーツにおけるジェンダーについて

## Gender of Sport

1K06B209

水本 舞

指導教員 主査 リー・トンプソン先生

副査 杉山千鶴先生

### 【はじめに】

大学の授業でジェンダー論が学習テーマにされた際、女性スポーツ、特に女子サッカーに対する筆者の価値観と、女子サッカー界にあまり詳しくない人との価値観に違いがあることを知った。それは、喜びの表現方法を例にあげると、男性同士が抱き合って喜ぶ姿には共感を覚えるが、女子サッカー選手が同じように抱き合って喜びを表現する姿には違和感を覚えるという人が男女ともにいたことである。これは、筆者にとってとても衝撃的なことだった。そこで、筆者自身のスポーツ経験をふまえ、スポーツにおけるジェンダーについて考えてみようと思った。

### 【第1章】

19世紀のイギリスで近代社会の成立とともに発達したスポーツははじめ、男性のための一種の道徳教育であり、近代社会の求める「男らしさ」を養っていくための文化として位置づけられていた。第2回のパリオリンピックでは、女性種目はテニスとゴルフのみで、女性は977人中22人だった。オリンピックのスローガンである「より速く、より高く、より強く」を目指すことで、男性は「男らしさ」を発散できる。しかし、女性に期待される性役割は、男性とは正反対であり、女性がスポーツに参加すること自体が矛盾していた。しかし、時代は流れ、スポーツ以外にも女性の社会進出が盛んになり、2004年のアテネオリンピックでは、女性選手の参加は全体の4割以上になり、日本選手団では女性の方が多かった。この女性のスポーツ参与の隆盛要因を参与率や参与の仕方、性役割

分業などという点から探っていく。

### 【第2章】

女性のスポーツ参与率の分析から、女性が女性であることによってどう社会で位置づけられてきたかを知るために、既存のジェンダー言説を紹介する。性別はあとから構築されて決められた差異にすぎないと主張するジェンダー論派と、「ジェンダー」という言葉への対抗を生物として根源的差異があることを根拠に主張するバックラッシュ派とも、「いま、ここ」に生きる私たちの身体を意識することなく語っている。

### 【第3章】

現代社会では、「スポーツ＝男らしさを養うもの」ではない。そのような現在でも、スポーツ報道は女性がスポーツすることに違和感を抱いている。いまだに、性役割分業の考え方を引きずっている。いま、スポーツはジェンダー最後の砦といわれている。スポーツとジェンダーの歴史を追ってスポーツにみるジェンダーについて考える。

### 【第4章】

スポーツの競技特性と「女らしさ」について考える。社会が女性に求める「女らしさ」のイメージが障害となって、女性がスポーツを自由に楽しめないでいる。スポーツを「遊戯性・競争性・激しい身体活動」という3要素に分けて、それぞれと「女らしさ」との関連について探る。歴史的に社会が性別によって求めてきた役割がある。「男は外で、女は内で」という考え方である。現在の自由主義社会では、建前上は、性役割はなくなり、男女平等となっている。しかし、

実際は、多くの国や地域で性差は色濃く残っている。